

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1998年度 年 報



2000.3

栗 東 町 教 育 委 員 会
財 栗 東 町 文 化 体 育 振 興 事 業 団

表紙の写真 (上) 林遺跡④

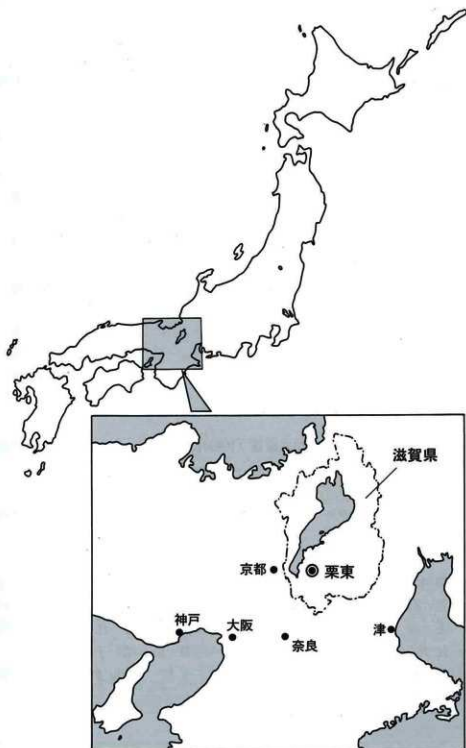
(土坑周辺作業風景)

(下) 辻遺跡⑬

(方形区画溝遺物出土状況)

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1998年度 年 報



2000.3

栗東町教育委員会
（協）栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1998年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助事業および町事業の概要である。
2. 調査にあたっては滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が主体となり財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助事業および町事業は栗東町教育委員会が実施した。

3. 調査体制は以下のとおりである。

栗 東 町 教 育 委 員 会	社 会 教 育 課	課 長 乾 澤 亮
	文 化 財 保 護 係	係 長 清 水 好 洋
		主 査 松 村 浩 浩
		主 事 福 田 茂 幸
財団法人栗東町文化体育振興事業団	埋蔵文化財調査課	課 長 奥 村 明
	調 査 係	係 長 大 崎 隆 志
		主 査 近 藤 広
		主任技師 佐 伯 英 樹
		技 師 雨 森 智 美
		技 師 藤 岡 英 礼
	管 理 係	主 事 宮 川 圭 二

4. 本書の執筆は各調査担当および管理係田中康雄（1999年度）が行い、編集は執筆者の意向のもと近藤が行った。
5. 調査内容中の調査位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて5千分の1である。

6. 調査参加者

現地調査作業	青 木 タキ子	井 上 良 子	上 田 和 江	大 岡 道 代
	教 野 妙 子	北 野 ふみえ	駒 井 伊 助	国 松 好 子
	芝 原 慶 子	渋谷 享 一	園 田 菊 江	千 代 清 美
	辻 井 一二美	西 田 百合子	森 野 靖 子	横 山 こ と
整 理 作 業	岩 根 隆 子	奥 村 美 枝 子	木 村 三 津 子	穴 戸 貴 子
	宮 嶋 八 重 美	森 智 美		

目 次

例 言	1
目 次	2
事 業 報 告	3
栗東町遺跡地図	5
遺 跡 位 置 図	6
受託事業一覧表	8
1 野尻遺跡	9
2 野尻遺跡	10
3 野尻遺跡	11
4 林 遺 跡	15
5 多福寺遺跡	19
6 高野遺跡	27
7 高野遺跡	29
8 下 鈎 遺 跡	31
9 辻 遺 跡	32
10 辻 遺 跡	33
11 辻 遺 跡	35
12 辻 遺 跡	37
13 辻 遺 跡	39
14 辻 遺 跡	41
国庫補助事業・町事業一覧表	44
15 辻 遺 跡	45
16 辻 遺 跡	46
17 下戸山古墳	47
職員の活動記録	53

事業報告

1. 発掘調査事業

- ・現地調査受託事業件数……15件
- ・国庫補助・町事業調査件数……4件
- ・整理調査事業……1件

2. 公表事業

- ・現地説明会の開催

「辻遺跡」

日時 平成11年3月21日

参加者 46名

内容 古墳時代中期の初期須恵器と平安時代
鉾尾の発見

「辻遺跡出土縄文時代配石遺構の紹介」

日時 平成10年10月7日(水)

内容 縄文時代後期配石遺構の発見と復元

備考 各社マスコミ発表

- ・収蔵企画展示

会場 出土文化財センター1階収蔵展示コーナー

期日 年2回(4月～9月 10月～3月)

内容 「古代の寺と役所」「中世・近世の美」

収蔵資料のテーマ展示

展示内容説明のパンフレット作成

- ・調査情報速報展示

会場 出土文化財センター2階収蔵展示コーナー

期日 随時

内容 「辻・高野遺跡発掘調査速報展」

「小柿遺跡発掘調査速報展」

「収蔵整理成果展」

展示内容のパンフレット作成

- ・埋蔵文化財発掘調査成果展・スライド報告会

(栗東歴史民俗博物館共催)

日時 平成10年1月23日(土)

会場 栗東歴史民俗博物館

内容 平成9年度の主要な埋蔵文化財

発掘調査成果のスライド報告会

3. 普及・啓発事業

- ・出土文化財センター入門講座

「子ども考古学自由研究クラブ」2回

会場 出土文化財センター文化財学習室等

日時 平成10年7月25日(土)・8月1日(土)

参加者 63名(親子)

内容 体験学習(昔のくらし体験-縄文クッキーづくり-)

講師 当事業団職員

辻遺跡の新聞記事▼



▼辻遺跡配石遺構の展示



▼子ども考古学自由研究クラブ▼



・出土文化財センター講座

「聞く！見る！ふれる！“ふるさとと過去”」4回

会場 出土文化財センター文化財学習室

日時 平成10年10月11日(土) 18日(土) 25日(土)

参加者 87名

内容 「弥生時代の草津」「縄文時代の栗東」「弥生時代の栗東」

体験講座「拓本をとうろく！」

講師 1) 藤井 朗氏 (草津市教育委員会)

2) 近 藤 広 (当 事 業 団)

3) 雨森智美・藤岡英礼 (当 事 業 団)

4) 辻 川 哲 朗氏 (財団法人滋賀県文化財保護協会)

・出土文化財センター調査研究報告会

「近江 — 考古学上の位置づけとその評価 —」

会場 出土文化財センター文化財・学習室

期 日 平成10年2月7日(土)

参加者 43名

内容 「地方官衙関連遺跡の構造と立地」をテーマに野洲郡・栗東郡の事例を中心とした報告とミニシンポジウム

コーディネーター 辻 広 志氏 (中 主 町 教 育 委 員 会)
パネラー 谷 口 智 樹氏 (草 津 市 教 育 委 員 会)
内 田 保 之氏 (財団法人滋賀県文化財保護協会)
岩 崎 茂 氏 (守 山 市 教 育 委 員 会)
花 田 勝 広氏 (野 洲 町 事 業 団)
雨 森 智 美 (当 事 業 団)



▲調査研究報告会
▼センター講座



・古道ウォーク・栗東町歩こう会

「湖南アルプスの散策」

会場 湖南アルプス (粕坂磨崖仏・金勝寺・白糸の滝・十九道ダム他)

期 日 平成10年11月14日(土)

参加者 64名

内容 湖南アルプスの史跡や文化財にふれあい、文化教養を高めるとともに健康づくりを図る

・随時教室事業

会場 出土文化財センター文化財学習室等

件 数 14件 治田西小学校、治田小学校、

金勝小学校、栗東中学校他

内容 勾玉づくり指導、町内遺跡の説明、調査スライド映写会等

・冊子等の発行

・概報「栗東町埋蔵文化財発掘調査 1997年度 年報」

・概報「収蔵整理概要調査 1997年度」

・冊子「はくつ'98」

・「子ども考古学通信3号」(和田古墳群の紹介)

・「収蔵展示パンフレット③」

・「収蔵展示パンフレット④」

・職員の講師等派遣

件 数 5件

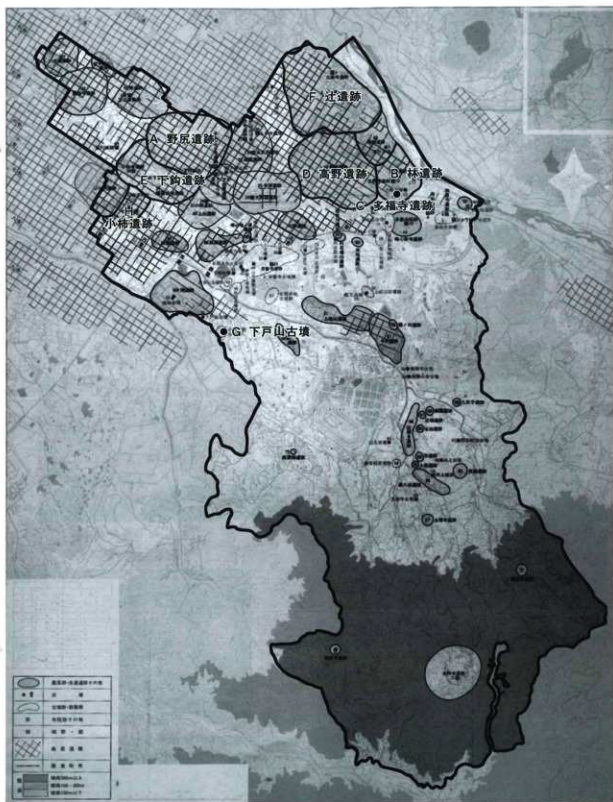
内容 草津市立玉川中学校社会科講師、滋賀県埋蔵文化財センター研究会他

▼和田古墳公園の説明



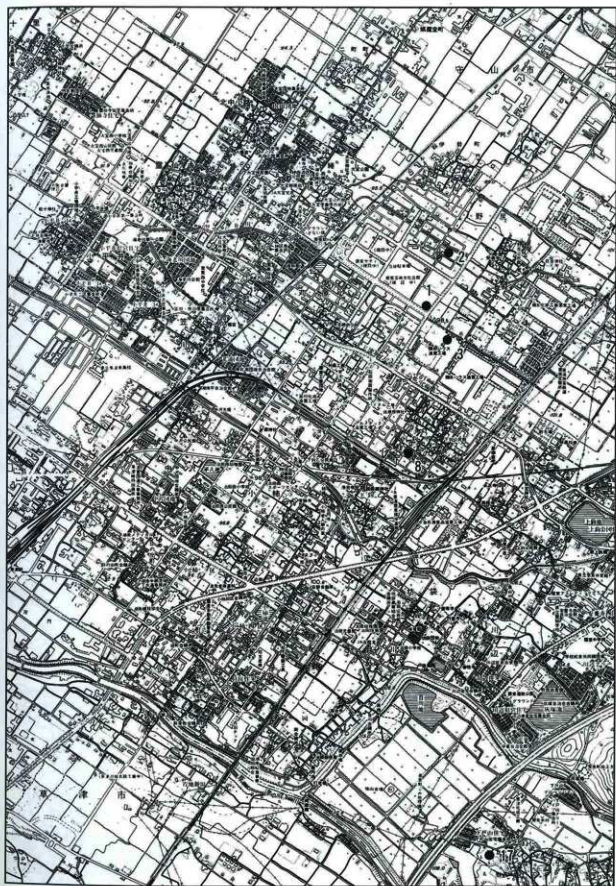
▼文化財教室



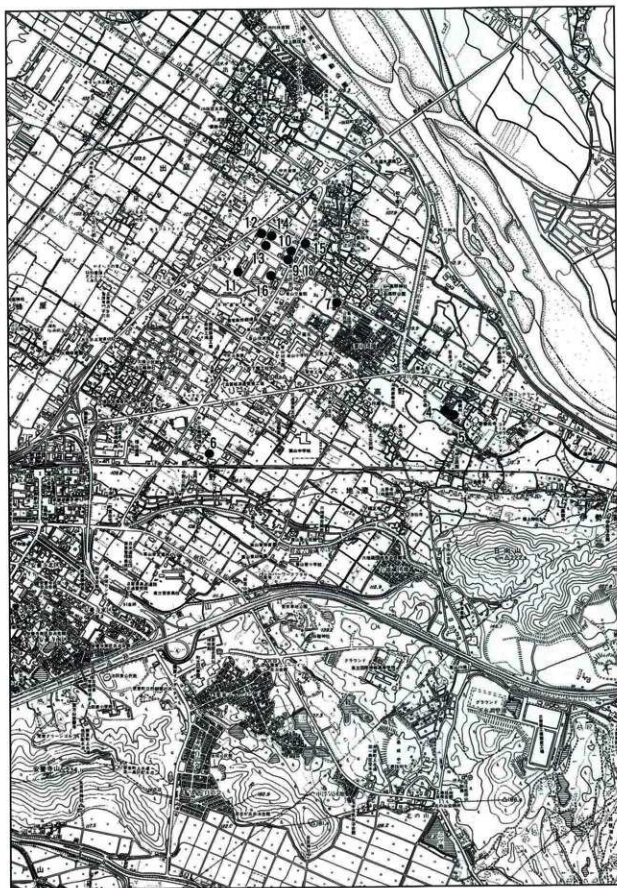


栗東町遺跡地図 (A~H 本書に登場する遺跡)

『栗東の歴史』第4巻付図 (作図 森田房) 1994を一部改変



遺跡位置圖① S = 1 : 20,000



遺跡位置図② S=1:20,000

財団法人栗東町文化体育振興事業団 埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査

1997年度受託事業調査一覧表

No	遺跡名	所在地	調査期間(現地)	原因	調査面積	調査結果	ページ	担当
1	野尻	下駒字下末竹878-1879	980603~980731	共同住宅建設	950㎡	溝・粘土採掘坑(中世~近代)	9	大崎
2	野尻	野尻字南大平田485	980805~980827	区画整理 保留地造成	460㎡	溝・土坑(中世~近代)	10	近藤
3	野尻	下駒字北蔵652-1	981116~991220	事務所建設	500㎡	竪穴住居・溝・濠(弥生) 河川(古墳)	11~14	佐伯
4	林	林字藤塚278,277-9,278-1	980706~981106	宅地造成	1892㎡	竪立柱建物・溝・土坑 (奈良・鎌倉~室町)	15~18	佐伯
5	多福寺	林字田福寺273・271-1	980916~990304	宅地造成	3085㎡	竪立柱建物・溝・土坑 (鎌倉~江戸)	19~26	藤岡
6	高野	六地藏字高木1148-1 ほか	980608~980804	事務所建設	328㎡	竪穴住居・竪立柱建物ほか (古墳~平安)	27・28	藤岡
7	高野	高野502-1	990111~990127	都市計画 道路工事	200㎡	河川(奈良)土坑(鎌倉) 井戸(不明)	29・30	佐伯
8	下駒	下駒字松ノ内1613・1614	980713~980812	共同住宅建設	225㎡	竪穴住居・土坑・(縄文~平安) ビット	31	藤岡
9 08	辻	辻字東八王子421-1・421-7	980629~980713	店舗建設	80㎡	石列(縄文) 竪立柱建物・溝(古墳~平安)	32	近藤
10	辻	辻字東八王子426-1	980527~980624	共同住宅建設	280㎡	土壇墓・溝・流路(古墳~平安)	33・34	佐伯
11	辻	辻地先	980916~981127	区画整理 保留地造成	838㎡	ビット(縄文) 溝・竪立柱建物(古墳~平安)	35・36	近藤
12	辻	辻字東八王子576	990127~990310	宅地造成	437㎡	河川・溝(古墳~鎌倉)	37・38	佐伯
13	辻	辻字東八王子581	990127~990324	宅地造成	636㎡	竪立柱建物・溝・河川 (古墳~鎌倉)	39・40	佐伯
14	辻	辻字東八王子573-1	981106~990219	倉庫建設工事	700㎡	竪穴住居(古墳~飛鳥) 溝・竪立柱建物(古墳~平安)	41~43	近藤

1999年度へ継続

小崎	小崎376	990310~継続中	宅地造成	4120㎡		藤岡
----	-------	------------	------	-------	--	----

① 野 尻 遺 跡

調 査 地 下鈎字下末竹878他

調査期間 1998年6月3日～7月31日

調査面積 950㎡



調査地位置図

野尻遺跡は縄文時代晩期以降、様々な遺構や遺物を残す複合遺跡として知られている。中でも伊勢・下鈎と云ったこの地域を代表する弥生時代集落遺跡に挟まれた中ノ井川流域の生産遺跡として興味深い内容を有している。

今回の調査でも近世以降ではあるが、湿気抜き用の溝（幅20cm深さ10～15cm）や、耕作時の掘り込み跡（幅30cm深さ5～10cm）などが一面に残され、その特徴の一端を垣間見せている。

また、調査区ほぼ中央には通称「灌漑井戸」と呼ぶ直径10m、深さ2m以上の粘土取り用の掘り込みも確認された。

（大崎）



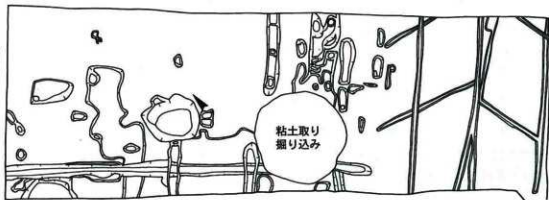
調査区全景



粘土抜き取り掘り込み



溝 跡



調査区遺構図

② 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字野尻字南大平田485

調査期間 1998年8月5日～8月27日

調査面積 約460㎡



調査地位置図

今回の調査は、野尻土地区画整理事業に伴う保留地部分の調査で、中世以降から近代までの溝、土坑（SX-1、SX-2）、ピットなどを確認した。

SX-1・SX-2のような土坑は、これまでに栗東駅前周辺の調査で、多数確認されている。形態は、方形もしくは隅丸方形であることが多い。規模は完存するSX-2で、一边約5m、深さ1.6m以上である。時期は、遺物が無いので特定しにくい、遺構の切り合い関係から、明治～大正頃と推定される。性格については、かんばつ用の土坑とする意見があるが粘土採掘土坑の可能性も考えておきたい。（近藤）



調査区東側作業風景

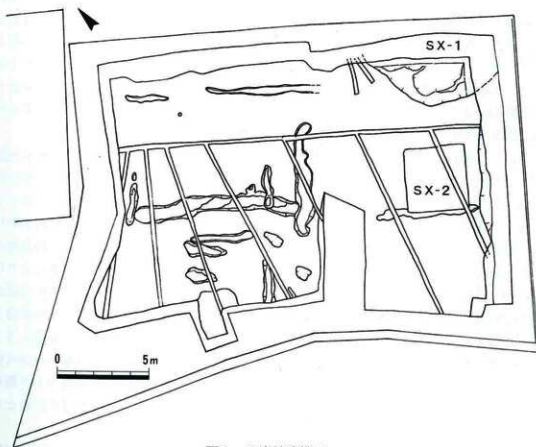


図1 調査地遺構図

③ 野 尻 遺 跡

調査地 栗東町大字下鉤字北蓋 652-1他

調査期間 1998年11月16日～12月20日

調査面積 500㎡



調査地位置図

野尻遺跡はJR東海道本線（琵琶湖線）栗東駅の東側、大字野尻と大字下鉤に広がる縄文時代以降の複合遺跡である。過去の調査では1998年に溝と柵を方形に巡らせた5世紀の豪族居館が確認されている。弥生時代の遺構としては、自然流路や溝があり、溝からは木製品や銅銭が出土している。また、これまでに実施された栗東駅前の区画整理に伴う調査では相対的に低地が多かったため、弥生時代には河川や生産地であったようで、堅穴住居や掘立柱建物は未確認であった。

今年度は工場敷地内において事務所建設に先立ち、幅10m、長さ50m、面積500㎡で発掘調査を実施した。

遺構は弥生時代後期の濠と溝各1条、堅穴住居1棟、時期不明の建物1棟、古墳時代以降の河川を確認した。遺構検出面は耕作土直下で標高は98.7mである。堅穴住居の残存がわずか5cmであり、かなりの削平を受けていることがわかる。

溝SD1は幅65cm、深さ45cmの断面V字形の溝で、埋土が主に砂層であることから水路

として機能していたようだ。弥生時代後期末に埋没している。

溝SD7は幅2m、深さ90cm、断面形態はV字形に近い逆台形で礫層に達して掘削を止めている。長さ6mにわたり検出したが、90cmの深さを保ち突然途切れている。この事実からSD7が通常の水路ではなく、環濠などの区画施設であることがわかる。埋土は主に地山の混ざったブロック層で、人為的な埋め土と土塁が崩落したものと考えられる。遺物は弥生土器40個体以上が、ほぼ同一層からまとまって出土した。受口状口縁甕（1～3）、同小型甕（4）、短頸壺（5）、長頸壺（6・7）、器台（8～10）、高杯（11～13）の他、台付の小型甕等の器種があり、すべて後期前半のものである。その他、石棒の石製品が出土した。石錘の可能性もあるが、側面にも加工を施し整形していることから、石棒もしくは銅鐙の舌とみておきたい。

調査区南西端を北流する古墳時代の河川と一部重複して検出されたのが堅穴住居SH2で、平面形態は方形で6×5.5m、深さは5cm。東側壁の中央に二段構造の屋内土坑、中央に炉、4本柱の主柱穴がある。床面から弥生時代後期末の土器とともに鉄器の薄片7点と砥石が出土した。

その他、時期は不明だが6角形に配置された柱穴SB3を確認した。掘立の棟持柱建物か、削平された堅穴住居の柱穴であろう。

野尻遺跡は近江南部において弥生時代を代表する遺跡である伊勢遺跡と下鉤遺跡の中間の場所に位置する。今回の調査により伊勢遺跡の出現する弥生時代後期前半に野尻遺跡に環濠を持つ集落が存在することが確認されたことは、この地域の弥生社会を考える上で重要な発見となった。また後期末の堅穴住居から出土した鉄器片は、鉄器の出土が極めて少ない中、鉄の流通、普及を示す資料として貴重である。

（佐伯）

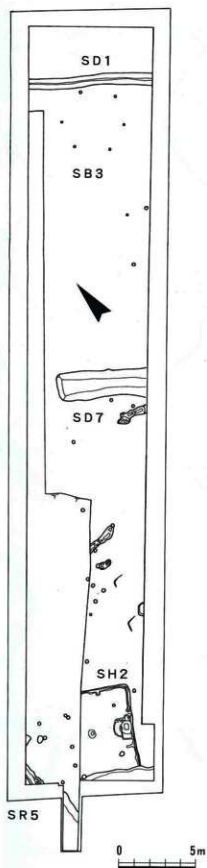


図2 調査地遺構図

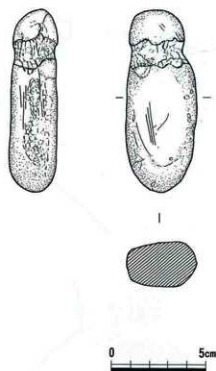


図3 SD7出土石製品実測図



石製品出土状況

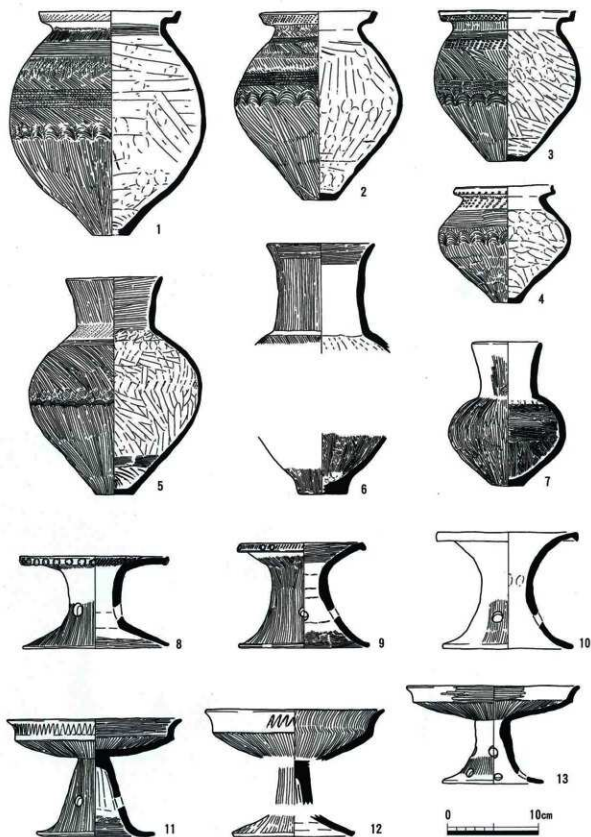


图4 出土遺物実測図



調査区全景



SB3



SH2



SD7 断面



SD7全景

④ 林 遺 跡

調査地 栗東町大字林字藤塚278-1他

調査期間 1998年7月6日～11月6日

調査面積 1892.89㎡



調査地位置図

林遺跡は近江最大の河川である野洲川が沖積平野へ流れ出した扇状地上部の標高110m付近に立地する遺跡である。過去に行われた調査はいずれも小規模なものであったが、古墳時代の堅穴住居等が確認されていた。また遺跡の範囲内には車塚、大塚、当調査地の藤塚などの小字名が残っており、地割りの観察からも削平された古墳の存在が推定されている。

今年度の調査は住宅地造成に先立ち実施した。遺構検出面は標高約110.4mで約25cmの耕作土と約10cmの床土を除去すると現れる。

検出した遺構は12～14世紀の掘立柱建物8棟以上、水路、区画溝、土坑墓1基、土坑7基などである。

掘立柱建物は最も大規模なS B 600で6×4間、柱間約2mで面積は108㎡である。幅約1m、深さ10～30cmの溝により一辺40m程の区画が設けられその中央に配置されている。土坑墓S K 349は長辺1.7m、短辺1.1m、深さ0.3mの規模で、12世紀代の土師器皿9点(図3-12～17)と瓦器皿1点(11)が副葬されていた。

区画溝が埋没した後に掘られたS K 513は

長辺3.8m、短辺1.8m、深さ0.9mの長方形土坑で、13世紀後半から14世紀代の黒色土器碗(図3の3～6)や土師器皿(9～10)の他、釜(羽釜)が13点出土した。釜は口径20～27cmで体部が球形に近く器壁の薄い大型品(1)と、口径20cm程で底部が平たく器壁の厚い小型品(2)に大別される。約半数ずつあり、大型品はいずれも火を受け底部が欠損している。これらの遺物は土坑が30cm程埋まった後、比較的短期間に廃棄されたようだ。釜が土坑から一括で出土した類例は少なく貴重である。

S D 256は幅3～4m、深さ1mの水路で、遺物は9～14世紀代のものとして緑釉・灰釉陶器、黒色土器、土師器が出土。その他少量の7～8世紀代の須恵器と土馬1点が出土した。土馬は素焼き製品で、胴部との接合面から剥がれ落ちた頭部、前足、後ろ足各1本と、鞍である。比較的写実的につくられていて、頭部には竹管状のものの刺突で目と鼻の穴を表現し、手綱は線刻により描いている。前足の長さは9.5cm、太さは先端で直径4cmである。栗東町内での土馬の発見例は、栗太郡衙の岡遺跡、官衙の手原遺跡、辻遺跡に次ぐ4例目(その後隣接する多福寺遺跡の同一水路から5例目が出土)となった。

本調査では林遺跡において初めて中世屋敷地の実態が明らかとなった。また、水路の出土遺物は律令期から中世にいたるもので、周辺に当該期の遺構の拡がりが見込まれる結果を得ることができた。さらに前述したように周辺に古墳に関わる地名が多いことや、時期は不確定だがS X 426のような周溝状遺構の存在、中世区画溝から碧玉製管玉が出土していることから、今後古墳群の存在にも注意を払いたい。

(佐伯)

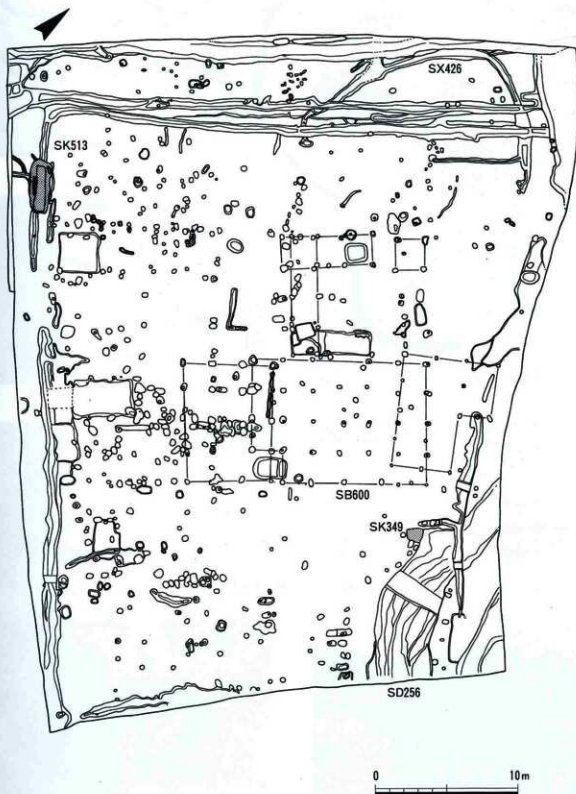


図2 調査地遺構図

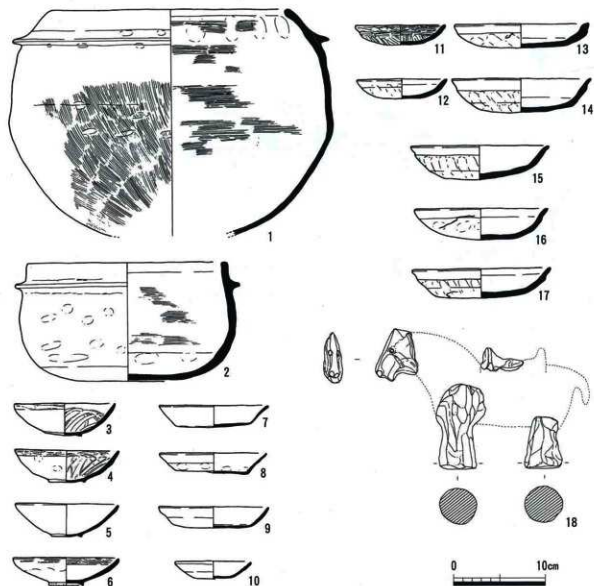


図3 出土遺物実測図



S D256断面（後方は多福寺遺跡と新善行寺）



土坑墓 SK349



S K513 (南西から撮影)



S K513 遺物出土状況



北西側調査区



南東側調査区

⑤ 多 福 寺 遺 跡

調 査 地 栗東町大字林字田福寺273、271-1

調査期間 1998年9月16日～1999年3月4日

調査面積 3,085㎡



調査地位置図

はじめに

多福寺遺跡は、小字「田福寺」の範囲に「多福寺跡」の伝承を残す。その位置は、林集落に南接して、江戸時代に創建された「新善光寺」を北に望む。このため、集落や寺地に寺跡が重複する可能性を持つが、明確な遺跡範囲は不明である。

寺史については同時代史料に欠けるが、江戸時代に編纂された『栗太志』によれば、金勝寺二十五箇別院の一つで、本尊を薬師如来とする。義淵僧正の開基とするため、奈良時代に創建されたい。

当調査区は、「字田福寺」のほぼ全面にあたる。寺跡に係わる発掘調査は今回が初めてで、基礎データの抽出が課題となった。

基本層序

調査地の基本層序は、地表面から遺構面までの層厚約35cmの間に、灰褐色粘質土（耕土）、赤褐色粘質土（床土）が2層づつ認められ、遺物包含層となっている。

遺構面は大別すると、白灰色シルト層（層厚5～10cm、上層）と茶褐色シルト層（下層）に分けられる。下層の下からは、流路と思われる礫・砂層を、調査地全面で検出したが、遺物は一切確認できなかった。上層は調査区南東側でのみ残存し、他は全て下層となる。調査区南東外の集落に続く畑地は、調

査地耕土から40cm高いこれを勘案すれば、調査地の諸遺構はかなり削平された可能性がある。

遺構面の時期は、上層に展開する遺構にSK-46・47があり、16世紀代の遺物が認められる。下層にはSK-119があり、15世紀代の遺物が認められる。上層中の包含遺物は13～14世紀代を中心とするが、下層遺構を勘案すれば、上層は16世紀代の整地と思われる。

遺構の概要

遺構は土坑・ピット・溝・大溝からなる。各遺構については詳述を避けるが、主要遺構の遺物を主体とした年代幅については、表1を参照されたい。なお遺構の重複関係は、遺物の年代幅に大概合致している。

これらによると、下層遺構面上で検出した遺構は、11世紀後半～12世紀代を中心とした溝（SD-193）を上限とする。13世紀以降は、土坑・大溝・ピットが整備され、造廃を繰り返しながら、上層遺構面に展開する16世紀頃まで存続する。

遺物の上限は、包含層中に須恵器片が若干認められる他は、平安時代後期の遺物がまわって確認できる。この中には軒平瓦が認められる。平安時代の遺構は溝の確認に留まったが、瓦の出土は当該期に成立した遺構の性格を考える上で重要な遺物となろう。

調査地の遺構は大別すると、コの字上に巡るSD-29に囲まれた地区と、調査地外縁に巡るSD-16に囲まれた地区に分けられる。

トレンチ北半分には、栗太郡主条里の角度に並行する溝（SD-80・66・67等）が見られ、内側にピット・土坑が顕著に確認されることから、区画溝として機能した可能性がある。

溝の存続時期は、北側が12～13世紀を主体とし（SD-193は11世紀代まで遡る）、南側は14世紀以降を主体とする。

南北両区にまたがる溝には、SD-27・16がある。SD-27は13世紀代で廃絶し、14～16世紀代を出土遺物の中心とする、SD-16に

主体を移す。

まとめ

今回の調査は、出土物が比較的豊富で、花瓶・瓦・合子・茶器など、16世紀代までの栗東の一般集落には認められない遺物を確認することができた。

このことは、寺院機能が16世紀代まで存続していた可能性を示唆するが、遺構の上では、特定に至らなかった。

遺構の変遷については、調査地北側の林道跡では、11～12世紀代を主体とした、掘立柱遺物や区画溝が存在するため、遺構の中心は、時期を降るに従い、暫時南に移動する可能性がある。ただし、寺院関係と思われる瓦などの遺物が、調査区の北側では見られないこと、林道跡側の遺物が一般集落のそれと変化がない点を留意すれば、寺院、集落の並立を考慮する必要がある。

現集落との関係は、遺構の廃絶と、集落成立の时期的な連続性を示す遺構が見られないため今後の課題となるが、17世紀代以降の遺物が若干認められること。新善光寺の創建が、寛文年間（1661～1673）とされる点を、より

深く検討し、集落変遷を考える必要がある。

（藤岡）



調査地東側全景



SD-16

表1

遺構	時期	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
SK-71							
SK-206							
SK-52							
SK-119							
SK-98							
SK-239							
SK-86							
SK-135							
SK-58							
SK-47							
SD-197							
SD-193							
SD-195							
SD-67							
SD-201							
SD-12							
SD-27							
SD-200							
SD-246							
SD-16							
SD-80							
SD-29							
SD-28							
SD-126							
SD-74							

実線は遺物量が多い時期を示し、破線は遺物量が少ないことを示す。ただし破線の場合、遺構の時期確定に難があるものを示す。

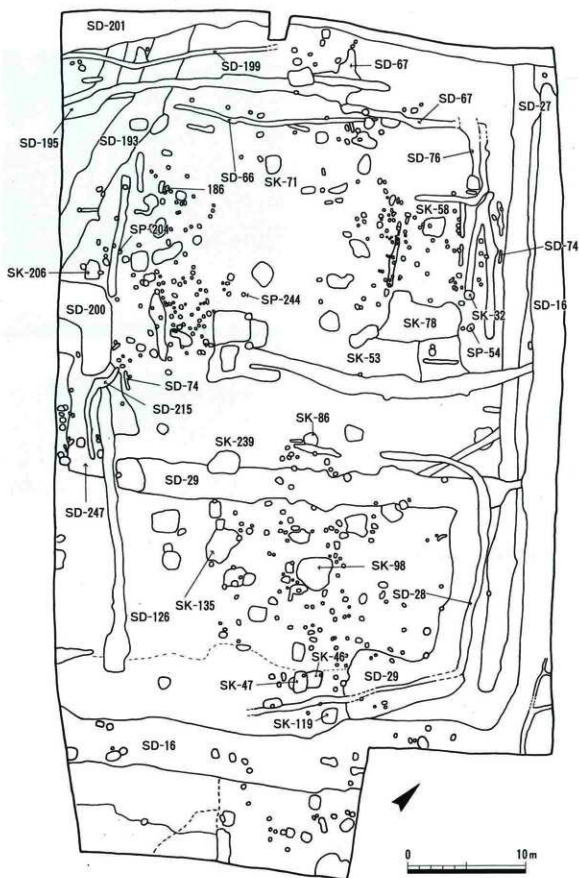
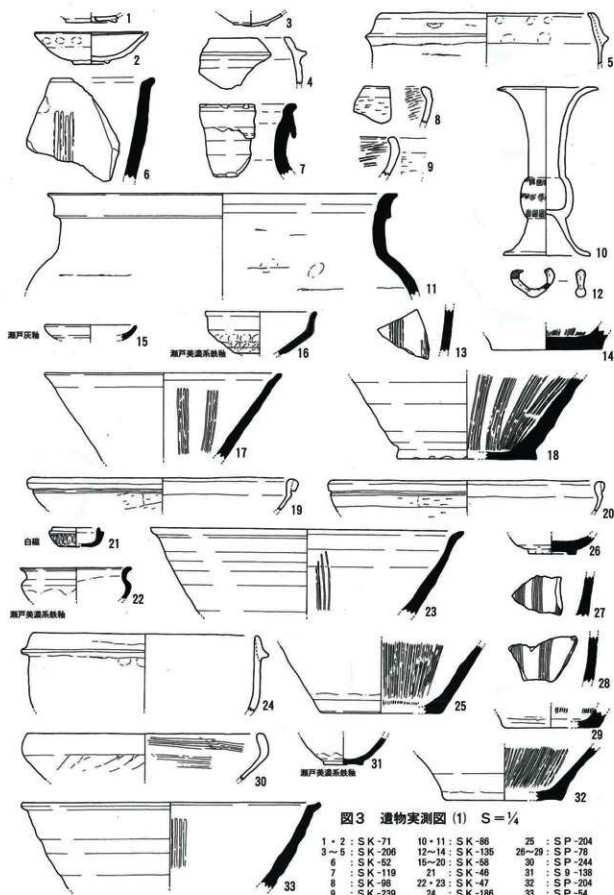


図2 調査地遺構図



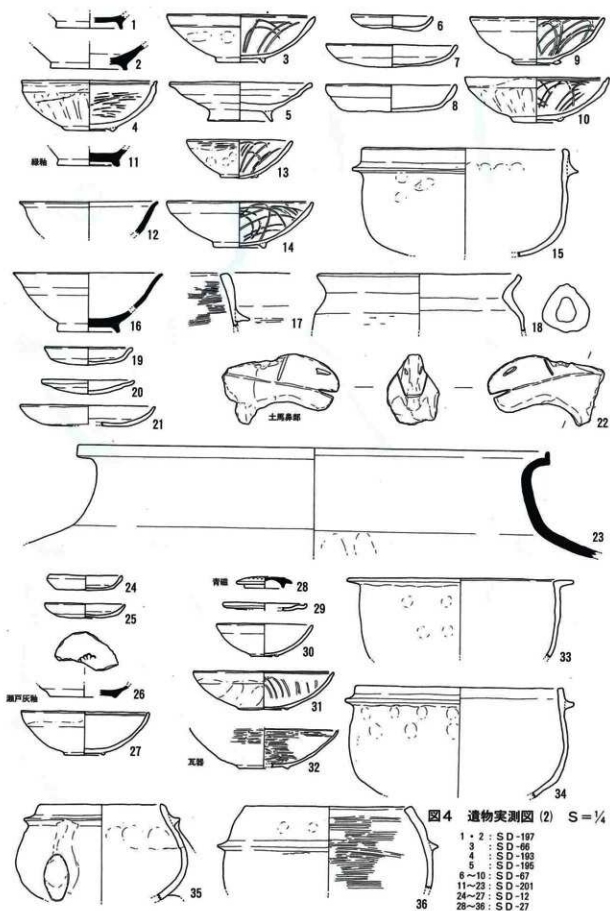


図4 遺物実測図 (2) S = 1/4

1・2 : S D-197
 3 : S D-66
 4 : S D-193
 5 : S D-195
 6~10 : S D-67
 11~23 : S D-201
 24~27 : S D-12
 28~36 : S D-27

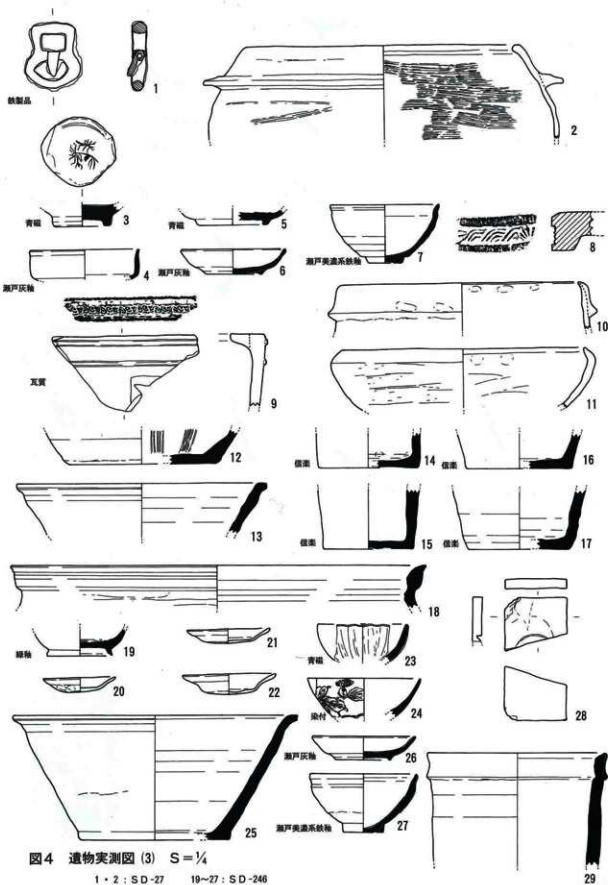


図4 遺物実測図 (3) $S = \frac{1}{4}$

1・2 : S D-27 19~27 : S D-246
3~18 : S D-200 28・29 : S D-234

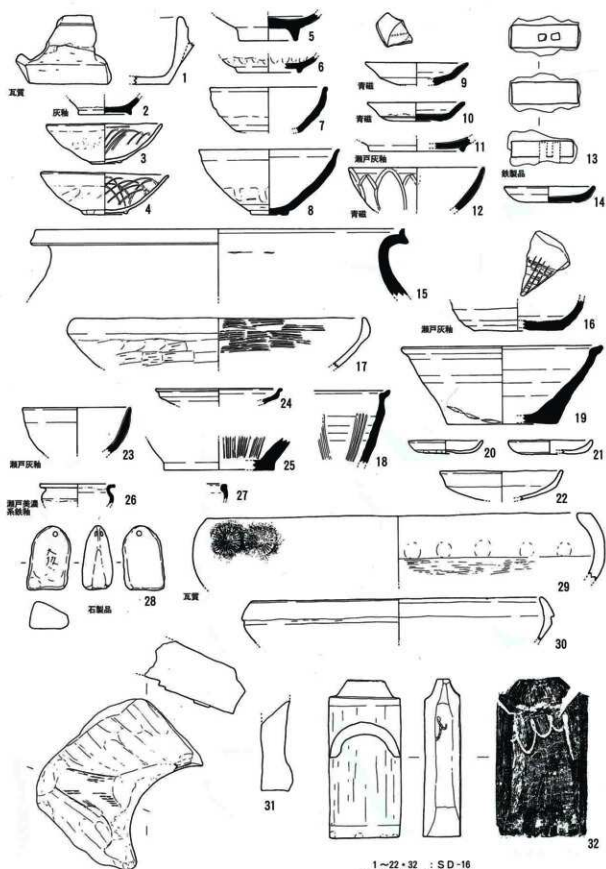


図5 遺物実測図 (4) S=1/4 (ただし、32は1/2)

1~22・32 : S D-16
 23~25・28・29 : S D-80
 26・27・30・31 : S D-29

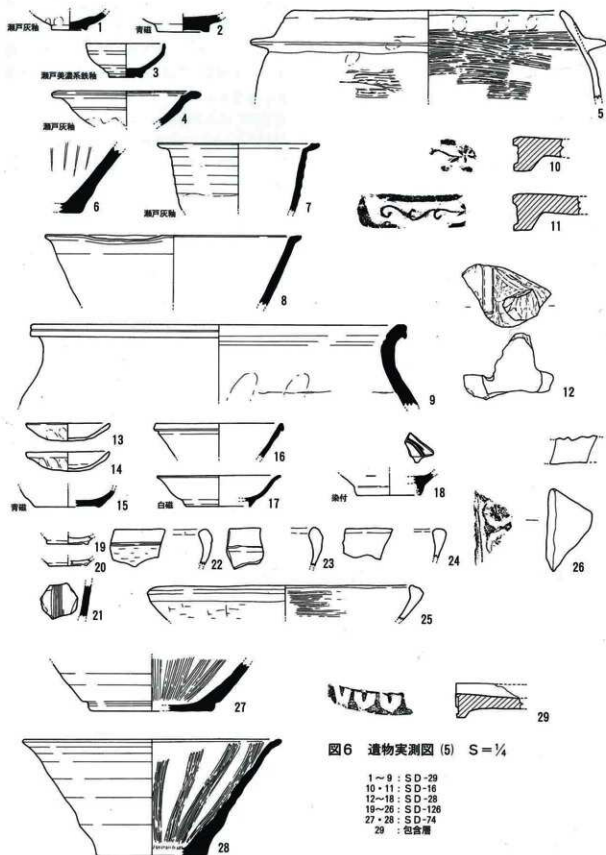


図6 遺物実測図 (5) S = 1/4

1~9 : S D-29
 10~11 : S D-16
 12~18 : S D-28
 19~26 : S D-126
 27・28 : S D-74
 29 : 包含層

⑥ 高野遺跡

調査地 栗東町大字六地藏字高木1148-1、

1149、1133、1153-1、1154-1

調査時期 1998年6月8日～8月4日

調査面積 328㎡



調査地位置図

はじめに

当調査地は、高野遺跡の範囲の中でも南西端にあたり、手原遺跡に隣接する地点にある。

過去の調査を概観すると、93年度には、奈良時代の掘立柱建物や墨書土器が検出され、手原遺跡との関連が指摘された。97年度には平安時代を主体としたビット群が確認されたが、奈良時代の建物跡は未検出であった。

調査地が位置する地形は、東から北西に向かう微高地で、南は現在の六地藏集落に挟まれる谷状の地形を呈している。

基本層序

調査地の基本層序は土層から順に、層厚約60cmの現代整地層（バラス）、層厚約20cmの灰褐色粘質土（耕土）、層厚約5cmの橙色粘質土（床土）を経て、茶褐色粘質土の遺構面（地山）に至る。

T-1東側では、床土と地山の間に、層厚約30cmの青灰色シルト層が認められる。青灰色シルト層中からは、緑釉陶器片が確認でき、土質の状況から平安期以降の当地は湿地状になっていた可能性がある。シルト層上では、部分的にビット・溝を確認したが、時期を特定する遺物に恵まれなかった。

主要遺構の概要

調査地は4つのトレンチに分かれるが、主要

遺構毎に概術する。紹介する遺構は、基本的に地山面で検出したものである。

SH-1：検出平面規模3.5×7m、残存壁高35cmを測る。一部で壁溝が確認でき、床面からの深さは5cmとなる。住居の大部分が後世の掘り込みで破壊されており、平面プランの詳細は明らかにできなかった。

出土遺物には鉢や高杯などを確認し、庄内併行期（3世紀代）の所産と思われる。検出遺構の中で、最も古い時期に属する。

SD-1：検出幅1.3m、検出深20cmを測る。重複関係から、SH-1に後出するが、時期を特定する遺物に恵まれなかった。

SD-46・26：重複関係により、SD-26が先行する。SD-46は、検出幅5m、検出深35cmを測り、青灰色系粘質土を埋土の主体とする。

SD-26は、検出深40cmを測り、灰褐色粘質土を埋土の主体とする。両河道とも部分的なトレンチ調査に留めたが、緑釉陶器片の出土から、平安時代に機能していたと思われる。

T-3：トレンチ全体が流路であり、青灰色系粘質土を埋土とする。7世紀後半～8世紀代の須恵器が出土した。

ビット群：T-1・2・4で確認した。時期を特定する遺物に欠けるが、須恵器が緑釉陶器を包含するビットに大別できる。

SB-1：2×2間の規模を測る。重複関係から、SH-1、SD-1に後出するが、時期の特定には至らなかった。建物方向はN-70°-Eで、磁北に近い角度を持つことから、奈良時代以前に機能した可能性がある。

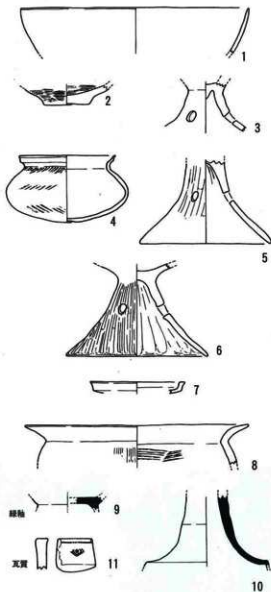
まとめ

今回の調査では、高野遺跡の南西端で初めて竪穴住居を検出した。調査区の位置する微高地は、調査区付近で、大橋と手原に分岐するが、今後は、立地を含めた住居のグルーピングをより留意する必要がある。平安時代集落の広がりを含め、今後の調査に期待する。

（藤岡）



調査地全景



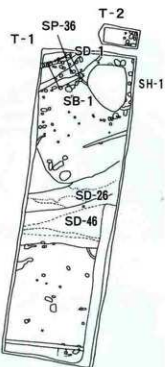
1~4 : SH-1 包含層
5~6 : SH-1 土坑
7 : SP-36

8・10 : SD-26
9 : SD-46
11 : T-1 包含層

出土遺物実測図 (S=1/4)



T-3



調査地遺構図

⑦ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野502-1

調査期間 1999年1月11日～1月27日

調査面積 200㎡



調査地位置図



調査地東側完掘状況



調査地西側完掘状況

高野遺跡は野洲川左岸の扇状地上部の標高約107～110mに立地する古墳時代前期から中期を主体とする遺跡である。

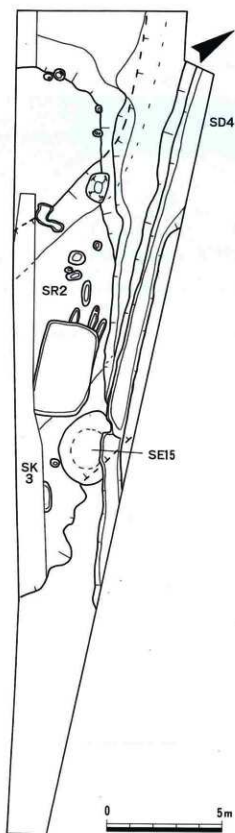
今回の調査は町道路拡幅の事前調査として実施した。調査地は遺跡範囲北東端の岩畑遺跡集落域に接する地点で、東側の先年度調査では6～7世紀代の竪穴住居などが調査されている。

20cmの暗灰色耕作土と10cmの黄色床土を除去すると黄色粘土または砂礫層の遺構面に達する。古墳時代後期から近代の遺構遺物を検出した。SK1は短辺2.5m、長辺4m、深さ35cmを測る近代の粘土採掘坑である。SD4は幅1～1.5m以上、深さ約25cm水路で江戸時代後期以降の陶磁器類が出土した(1～4)。SK3は1.3×0.8mの楕円形土坑で、中世の黒色土器片が出土した。SR2は南から北へ流れる河川で、幅は約10m、深さ0.6m。古墳時代後期の須恵器杯(5～8)、奈良時代の須恵器杯と壺(9～12・16)、土師器皿(13)、高杯(14・15)、平安時代の黒色土器碗(17)などが出土した。SE15はSR2が埋没してから掘られた井戸で、直径3m、深さ2.6mを測る。遺物は出土しなかった。

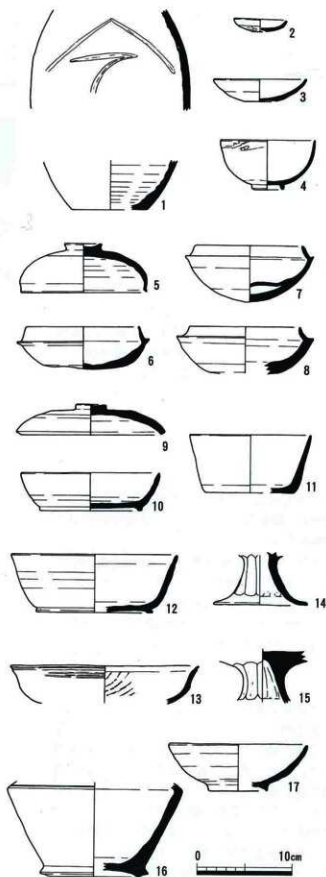
(佐伯)



SR2



調査地遺構図



出土遺物実測図

⑧ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字下鈎字松の内1613・1614

調査期間 1998年7月13日～8月12日

調査面積 225㎡

はじめに

下鈎遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。調査区周辺の過去の調査では、弥生時代の流路・古墳時代前期の遺物などが確認されている。

調査地の概要

調査地は、下鈎甲集落が立地する台地状の微高地に位置し、2箇所にはトレンチを設定して調査した。各トレンチの基本層序は、層厚約10cmの灰褐色粘質土（耕土）を経て、黒味を帯びた茶褐色粘質土の遺構面（地山面）に至る。以下トレンチ毎に概述する。

T-1：堅穴住居・溝・土坑を検出した。堅穴住居（SH-1）の、検出規模は2.5×4.5mで方形を呈し、3～4世紀代の甕などが出土した。

SK-1は、重複関係からSH-1に先行する。検出深35cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。甕片などが出土したが、時期の特定に至らなかった。

SK-9は、平面規模1.4×0.8mの楕円形を呈し、検出深23cmを測る。壺・高杯片が出土したが、時期の特定には至らなかった。

この他、ビット・流路を確認したが、いずれも時期を特定する遺物に恵まれなかった。

T-2：ビット・素掘り溝を確認した。素掘り溝は、条里方向を採るが、ビット共に時期を特定する遺物に恵まれなかった。

まとめ

今回の調査では、調査地の位置する微高地上で、初めて堅穴住居を検出した。下鈎甲集落では、これまで弥生時代に遡る遺物が確認されているが、遺構の検出には至っていない。今回の堅穴住居検出は、弥生から古墳時代にかけての集落展開を想定させ、その広がりを知る上で貴重となる。今後の調査に期待したい。

（藤岡）



調査地位置図

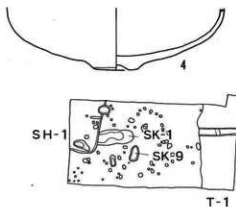


T-1 全景

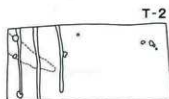


出土遺物実測図
(S=1/4)

1・2: SH-1
3・4: SK-9



T-1



T-2

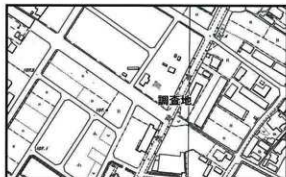
調査地遺構図

⑨ ⑱ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字八王子421-2・421-7

調査期間 1998年6月29日～7月13日

調査面積 約80㎡



調査地位置図

本調査区は、1994年度～1996年度に調査された辻・小坂西部土地区画整理地区内に位置する。縄文時代後期と考えられる配石遺構や古墳時代前期の玉作工房などが確認されている。

遺構および包含層は、上層と下層の2つに分けられる。

〈上層面〉

溝2条は、併行して南北方向にややカーブを描きながら延びている。規模は、SD-1で幅70～80cm、深さ15～20cm、SD-2で、幅80～100cm、深さ40cm前後である。出土遺物より、時期は古墳時代前期後半頃と考えておきたい。掘立柱建物は、前述した溝の西側に2棟重なって確認されている。いずれも一部しか確認されていないため全体を知ることができないが、柱穴より出土した遺物より、時期はおおむね平安時代中～後半頃のものと考えられる。また、粘土を採掘した跡と考えられる不整形の土坑が、調査区の南側全体に確認されている。調査区周辺の過去の調査成果から考えれば近世以降の所産と考えて大過ない。

〈下層面〉

上層面から10～15cm下げた部分で、20～40cm大の石が4mの範囲で列をなすように認めら

れる。また調査区南東側で、とくに縄文土器を包含する部分があり、サヌカイト片を出土している。

(近藤)

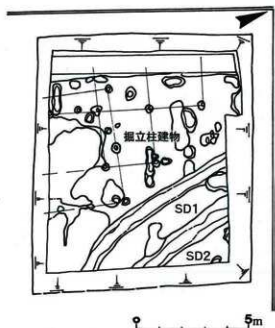


図1 上層遺構図



上層遺構全景（北から南を見る）



下層遺構作業風景（下右側縄文の石列）

⑩ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字東八王子426-1

調査期間 1998年5月27日～6月24日

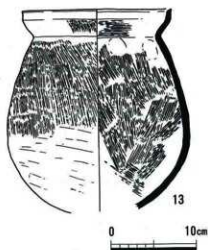
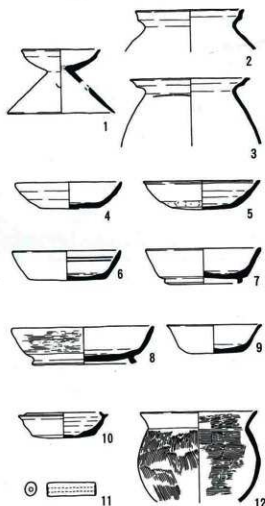
調査面積 280㎡



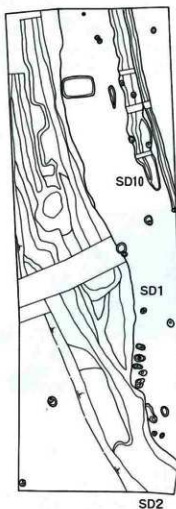
調査地位置図

辻遺跡は野洲川左岸の自然堤防状微高地に立地する古墳時代の大規模集落として周知されている。本調査は区画整理地内の店舗及び共同住宅建築予定地において実施した。

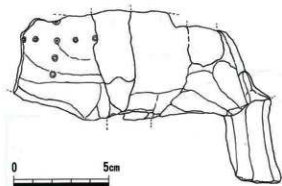
調査区は南東側店舗部分と北西側共同住宅部分の2調査区で、調査区を西流する河川跡、溝、土坑等を検出した。溝S D10は幅1.2m、深さ23cmで、古式土師器（布留式古段階併行）が出土した。1は小型器台、2・3は受口状口縁甕である。河川跡は幅推定14m、深さは検出面から約80cmである。何度も溝状に掘り直されるなど人の手が加わっている。出土遺物は7世紀から10世紀の土師器、須恵器。12世紀の黒色土器碗等が出土した。4・5は回転台土師器で11は管玉状を呈する須恵質の土鍾である。土馬は胴部と脚1本が出土している。竹管で尻繫を表現している他、前輪・後輪の剥落痕が見られる。土馬の出土は町内では官衙の手原遺跡、岡遺跡に続く3例目で、尻繫を竹管で現す点は手原遺跡出土品（8世紀）に共通する。（佐伯）



出土遺物実測図



調査地遺構図



土馬実測図



南東側調査区全景



北西側調査区全景



SD2最下層遺物出土状況

⑪ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻地先

調査期間 1998年 9月16日～11月27日

調査面積 約838㎡



調査地位置図

本調査は、辻・小坂西部土地区画整理に伴う3次保留地の調査である。調査された遺構・遺物は、大きく4時期に分けられ、古いほうから、縄文時代、古墳時代後期、平安時代中期、近世以降となる。縄文時代の遺構は、上層面から10～50cm下がった所で確認されている。落ち込み、ピット、風倒木痕などが存在し、ピットのいくつかは、建物になる可能性をもっている。また落ち込みの中には、焼土が堆積している部分が見られ注意をひく。縄文時代のどの時期に該当するかについては、土器が細片につき判断しにくい。しかし、過去の周辺調査の状況から判断すれば、後期に含まれる可能性が高い。土器以外の出土遺物では、石鏃、サヌカイト片がある。

古墳時代の遺構は、中央が弧状に張り出した幅約40～50cm、深さ約30cmの溝が存在する。時期は、SD-2から出土した須恵器から、5世紀後半頃の可能性が考えられる。おそらく他の溝も埋土から判断して同時期の所産と推定される。しかし周辺では、当該期の遺構は少なく、土器は後に混入した可能性も否定できない。

平安時代の遺構としては、掘立柱建物、柵列の他に、注目すべきものとしては、土師器



下層面作業風景



掘立柱建物（西から東方向）



埋納ピット遺物出土状況

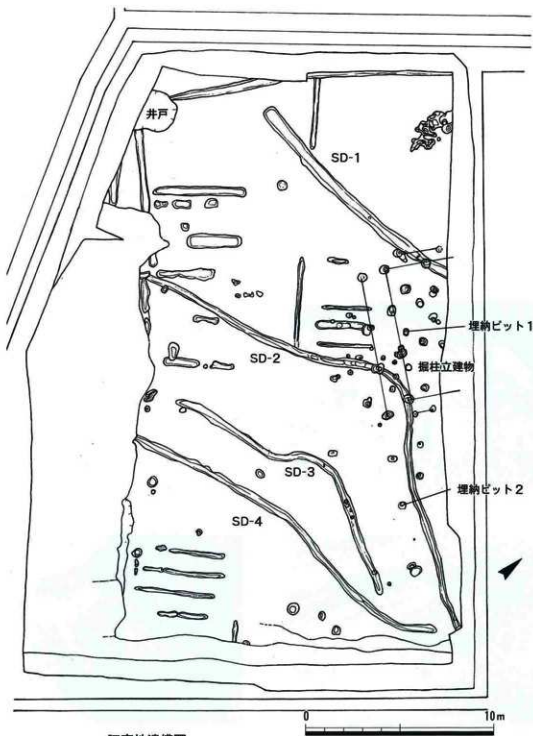


SD-2出土有蓋高杯

の皿と銅銭を埋納したビットが2カ所で確認されている。銅銭の残存状況は悪く、字の判読はできない。1996年度の区画整理C地区の調査では、同様な埋納ビットが集中する場所が存在したが、これらを含めて今後性格を検討して必要性がある。
(近藤)



SD-2 出土有蓋高杯 (S=1/4)



調査地遺構図

⑫ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字東八王子576

調査期間 1998年11月27日～1999年3月10日

調査面積 437㎡



調査地位置図



北側調査区



南側調査区

本調査区は後述する⑬辻遺跡調査区から流れてくる河川に全体が覆われている。柱穴群がある東端部や近世土探り坑（SK12・13）と耕作痕が確認された北東部では、河川の肩に近く表土から深さ70cm程で地山に達するためこれらの遺構が検出されているが、他は深さ1.5m程の河川となっている。なおトレンチT111の南西端では河川の底面が上がってきているので調査区南西端近くで河川の肩が現れると推定される。標高は河川の検出面で106.2mである。

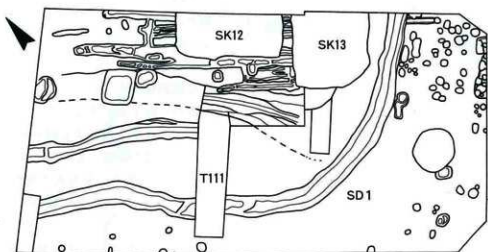
河川からは古墳時代前期の古式土師器甕（1）、高杯（2）、古墳時代後期の須恵器杯身（3）、奈良時代以降の須恵器（4・5）、緑釉陶器（8）、中世黒色土器碗（9～12）、瓦器碗（13）、白磁碗（14）、常滑焼の鉢（15）などが出土した。その他幅約1m、深さ0.25mを測る近世の溝SD1から銅製の鉋尾が出土した。鉋尾は長辺3cm、短辺2.2cm、高さ5mmで、腐食が激しいが表面の一部に黒漆が残存している。調査区周辺では奈良時代の「寺」刻書須恵器や平安時代の小型仏像、八稜鏡、銅印などが出土しており、寺や役人などの居館が存在していた可能性が考えられ興味深い。

（佐伯）

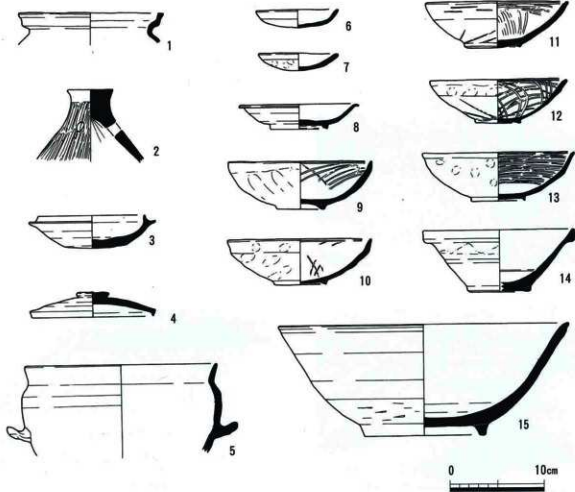
※律令期の鉋具は栗太郡衙の岡遺跡から石製の鉋尾と巡方が各1点、手原遺跡から石製巡方が1点出土している。



鉋尾出土状況



調査地遺構図



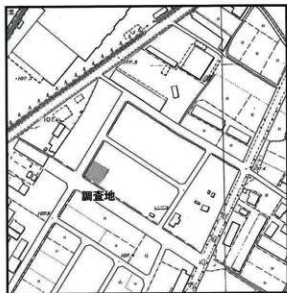
出土遺物実測図

⑬ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字八王子581

調査期間 1998年11月16日～1999年3月24日

調査面積 636㎡



調査地位置図



調査区北西側



調査区南東側

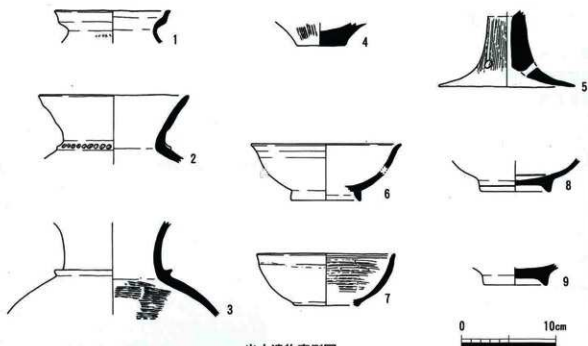
本調査地は前頁⑫辻遺跡の南西側にあたる。調査区には北流する河川SR3が貫通していて、地山は南西側では黄色粘質土、北東端では礫層が露呈している。河川は最小幅10m、最大幅20m以上、深さはT104の最深部で検出面から約1mである。T104周辺など河川の肩部には炭を包含する層があり、古墳時代前期の古式土師器(1・2・5)が出土した。またT104下層からも古式土師器が出土(3・4)しているが極めて少量のため河川全体の掘り込みは行わなかった。

掘立柱建物SB105はSR3が埋没してからつくられている。柱穴P36は直径40cm、深さ46cm、柱痕は径約20cmで、柱を抜いた後に黒色土器(7)や緑釉陶器(8・9)を埋納している。これらの遺物からSB105の廃絶年代は10世紀頃に比定される。また、SB105の北側には直径50～60cm、深さが最深で70cm程の比較的大きなピット群がみられるが、1996年度に調査された北西側道路部分の柱穴群と共に掘立柱建物を構成するものと思われる。1996年度調査の柱穴からは小型銅製仏像が出土しており、さらに前述した鉈尾の出土からも役人等の住居であった可能性が高い。その他P58からは灰釉陶器(6)、が出土した。SK1は土採り坑で、近世辻鋳物師にかかわる鋳型や炉壁状の物などが多量に廃棄されていた。

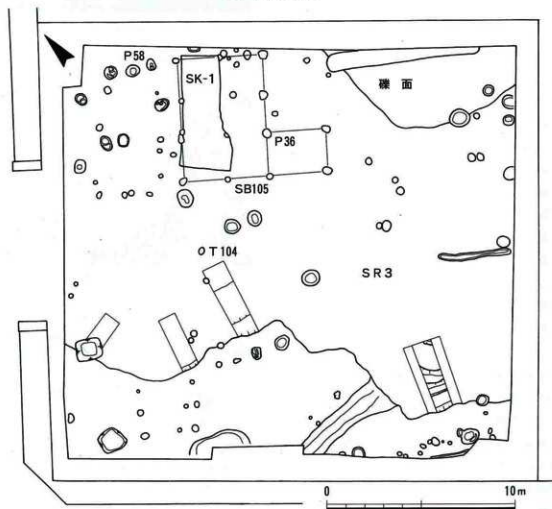
(佐伯)



掘立柱建物



出土遺物実測図



調査地遺構図

⑭ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻西八王子573-1
調査期間 1998年11月6日～1999年2月19日
調査面積 約700㎡



調査地位位置図

辻遺跡は縄文時代前期から近世以降まで続く複合遺跡である。なかでも古墳時代は、これまでに300棟以上の竪穴住居が確認されている。また碧玉製玉作工房や、渡来人の存在を示す韓式系土器や陶質土器がまとまって出土するなど大きな成果が得られている。

今回の調査は、民間の宅地造成工事に伴う調査である。確認された遺構・遺物は、Ⅰ期縄文時代、Ⅱ期古墳時代、Ⅲ期飛鳥時代、Ⅳ期平安時代、Ⅴ期江戸時代以降に分けられる。

Ⅰ期としては、縄文土器や石器を含んだ層が、調査区東隅で一部確認されている。

Ⅱ期は、古墳時代前期と中期に分けられ、前者は竪穴住居（SH1、3、5）、後者は区画溝が存在する。竪穴住居は、中央付近に地床炉をもち、周囲に壁溝を巡らすタイプである。ほぼ全体が把握できるSH1は、一辺が約5m前後の正方形プランに近く、深さ15～20cmである。他の2棟についても現状で5m以上の規模をもっている。また南辺中央には、貯蔵穴と考えられている土坑を配置し、SH3についても同様な土坑が認められる。時期はおおむね庄内新段階から布留式併行期に比定されよう。区画溝は、現状で北辺12m、東辺で5m以上（幅0.8～1m、深さ20～30

cm）を検出した。1996年度調査で同様な溝が確認されており、それを継ぐと南辺は不明だが、おそらく東西14m、南北12m以上の方形区画溝に復元できる。注目されるのは溝の北辺中央付近から土師器の高杯を伴って、近江では最古級（TK73段階）となる初期須恵器がまとまって出土したことである。その構



方形区画溝（南から北東方向）



SH3・4（西から東方向）



SH2・5（北から南方向）

成は、杯身2点、高杯2点、蓋3点の合計7点である。

杯身は底が平坦になるタイプと、底が丸みを持ち、深みのある羽釜形をしたタイプが存在する。高杯は2点とも無蓋高杯である。

類例の少ないものとしては、笠形を呈した蓋2点が存在する。内1点は羽釜タイプの杯身とセットになることが判明している。これらの須恵器は、形態および出土の特徴が陶邑周辺で焼かれたものと類似している。区画溝の時期は、1996年度調査で出土した須恵器や共伴した土師器から考えると、TK73段階より一、二段階下げて考えたほうがよさそうである。ところで区画溝の性格としては、墓や建物に関連する施設などの可能性が想定できる。今後類例をまわって検討していきたい。

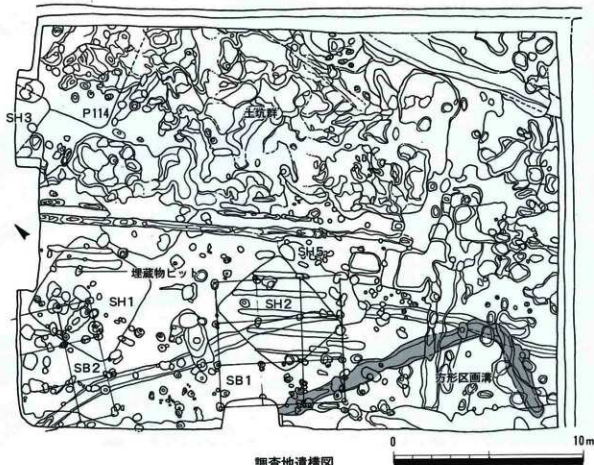
Ⅲ期は、竪穴住居3棟（SH2、4、6）、土坑、ピットが存在する。竪穴住居は、カマドをもつタイプで、SH4とSH2の建て替

え前のカマドが東辺（建て替え後は南辺）に存在している。SH6については、2ヶ所以上で焼土面を確認したが、かく乱が著しくはっきりしなかった。またSH2は、住居廃絶後に、カマドから延びる焼土、炭化面に礫を意識的に並べた特殊な部分がみられた。

Ⅳ期では、調査区中央南側でSH2、5を切る形で3間×3間の掘立柱建物（SB1）と、調査区西端で、3間×1間以上になる同様な掘立柱建物（SB2）が、ややSB1より西へ振る方位に存在する。またその北側で、ほぼ同時期と思われる銅銭と土師器を埋納したピットが存在している。

Ⅴ期では、調査区のほぼ東半分全体に、粘土を採掘した痕と思われる土坑が連続して存在する。時期は確定しにくい、堆積状況と周辺の調査事例から判断して、おおむね江戸時代以降の所産と考えられる。

（近藤）



調査地遺構図



埋納ビット出土銅銭



1・2 杯身 3・4 蓋 5・6 高杯
方形区画溝出土遺物 須恵器



SH-3 周辺作業風景

国庫補助事業・町事業 埋蔵文化財発掘調査

1997年度国庫補助事業調査

No	遺跡名	所在地	調査期間(現地)	原因	調査面積		ページ	担当
15	辻	辻411-1	980512～980521	個人住宅建設	65㎡	土坑・溝・ピット(平安～近世)	45	藤岡
16	辻	高野北サルガウ604・608	980512～980521	個人住宅建設	75㎡	掘立柱建物・土坑・溝(平安～近世)	46	近藤
17	下戸山古墳	下戸山地先	990629～990703	史跡指定	20㎡	竪穴住居(古墳) 溝	47～50	佐伯
18 (9)	辻	辻字東八王子421-2・421-7	990629～990713	個人住宅建設	80㎡	No 9と同様	32	近藤

⑮ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻411-1

調査期間 1998年5月12日～5月21日

調査面積 65㎡

はじめに：当調査地は辻遺跡内でも南西端に位置する。隣接する96年度調査地では、竪穴住居や7・12世紀代のビット、近代の溝・土坑が確認されている。

基本層序：層厚約20cmの灰褐色粘質土（耕土）直下に、黄褐色系粘質土の遺構面（地山）が存在する。96年度調査地では、耕土と地山面の中間に明黄色系粘質土や、青灰色系粘質土（近代遺構面）が存在するが、今回の調査地では確認できなかった。

遺構はいずれも同一面で確認されており、包含層は認められない。

主要遺構の概要：平安時代から近代に至る時期の遺構を確認した。

SK-1：調査区の南半を占める。「辻鋳物師」による原料（粘土）取得用の採掘坑であり、原料採掘後に、スラグ、瓦等を廃棄し、埋め立てている。埋土の遺物はいずれも近代のものである。

SD-10：検出幅50cm、検出深40cmを測る。埋土は大別すると、土層から順に、黄褐色系粘質土（地山土）→灰褐色粘質土→明黄色系粘質土からなる。出土遺物には、播鉢や染付などがあり、近世に機能、破棄された溝と思われる。

SP-1：緑釉陶器が出土しており、平安期の所産と思われる。ビットの時期が判断できる遺構は上記のみであった。

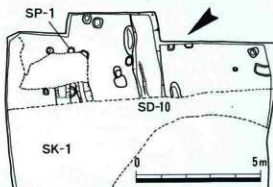
おわりに：今回の調査では竪穴住居は検出できなかったが、平安時代の遺構の広がりを確認した。高野・辻遺跡では、平安時代の八稜鏡や小型仏像が出土しており、当該期の遺構の広がりについても留意する必要がある。今後の調査に期待したい。（藤岡）



調査地位置図



調査地全景



調査地遺構図



1・2：SP-1
3～5：SD-10

⑯ 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字北サルガウ604・608

調査期間 1998年5月12日～5月21日

調査面積 約75㎡

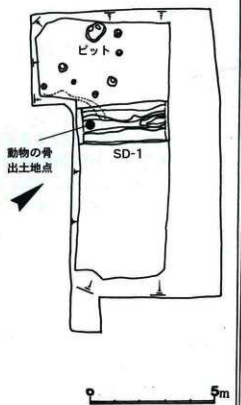


調査地位置図

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、古墳時代後期以降の溝（SD-1）と建物もしくは、柵のようなものになる可能性をもつピットがSD-1の西側に集中する。

SD-1は、南西から北東方向へ延び、検出長3.7m、幅1.4～1.5m、深さ20～25cmである。ピットは、埋土や形態の特徴などから、2時期が想定できる。やや大きめのピットは、埋土の特徴より近世以降の可能性がある。出土遺物は古墳時代から平安時代に含まれる須恵器、土師器の他に、磨石もしくは叩石として使用されていたと思われる球形状の石と、SD-1から動物の骨（馬骨の可能性あり）が出土した。

（近藤）



調査地遺構図



調査地西側（西から東方向）



SD-1（南西から北東方向）



調査作業風景

⑬ 下戸山古墳

調査地 栗東町大字下戸山野海道

調査期間 1999年6月29日～7月3日

調査面積 20㎡

下戸山古墳は金勝山地から派生する低丘陵上に築かれた古墳で、そこは琵琶湖南部の沖積平野を望む位置にあたる。また、丘陵の両脇からは主要河川である草津川と金勝川が平野部に流れ出る水系を押さえる要衝でもある。同一丘陵には南約200mに前期古墳北谷1・11号墳を含む北谷古墳群（消滅・4～6世紀）、南東300mには式内社小槻大社境内を中心に分布する小槻大社古墳群（10号墳のみ調査5世紀、9基残存）さらに北西600mには岡遺跡の栗太郡衙を挟み、地山古墳（90mの帆立貝形・5世紀）が存在する。ここにみるようにこの丘陵上には古墳時代前期から後期まで首長墓を含む古墳群が連綿と築かれており、律令期には郡衙や式内社が損地されるなど当地域において重要な位置を占めていたことが窺えるのである。

下戸山古墳は直径30mの円丘部を残しその周りは墓地となっているため墳丘の破壊が懸念されることから範囲確認、町史跡指定へ向けて1993年度から随時調査を行ってきた。

1993年度は地形測量調査を実施し、円丘部

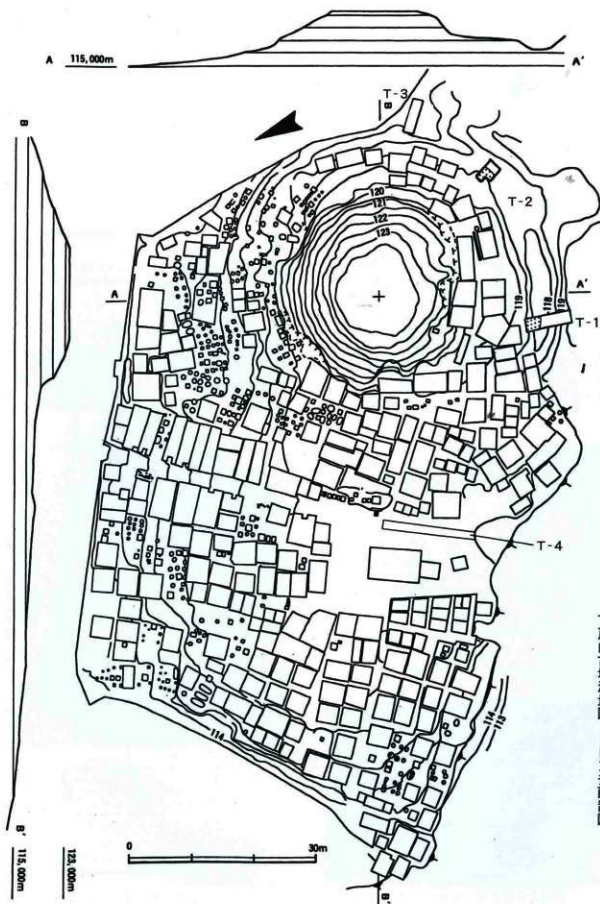
の直径が約50m、高さ約7.5m、地形からみて丘陵尾根が延びる西側に前方部が存在する可能性を指摘できる結果を得た。続く1996年度の調査はさらに正確な墳丘規模を確認するため、円丘部南側に現況でみられる周溝部分1箇所と、その延長線上の2箇所にトレンチを設定して発掘調査を実施した。その結果第1・2トレンチで葺石を検出し、墳丘底部を確認した。墳丘規模は直径50mである。

周溝規模は第一トレンチで幅約4m、深さ2mを測り、埴輪及び古式土師器が出土した。埴輪は土師質の壺形埴輪もしくは円筒壺（朝顔）形埴輪の口縁部から頸部で、古式土師器は受口状口縁甕の口縁部である。いずれも4世紀代のものであった。

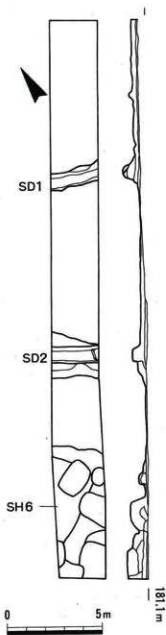
今年度の調査は丘陵の尾根が延びる円丘部中心から西側30mの地点で、前方部の存在が推定される範囲内で調査可能な部分1箇所に幅1.2m、長さ15mのトレンチを設定し発掘調査を行った（T-4）。表土である層厚2～15cmのやや汚れた山砂を取り除くと黄白色土の地山となる。遺構は江戸時代後期の伊万里焼き染付湯呑みと皿の完形品各1点が出土した溝SD1、時期不明の溝SD2、トレンチ南端の丘陵肩部付近では火葬骨や炭を埋納した土坑（火葬墓）が7基と堅穴住居1棟を確認した。火葬墓は全体のわかるもので長辺約1m、短辺50～80cmの長方形で、深さは12～



調査地位置図



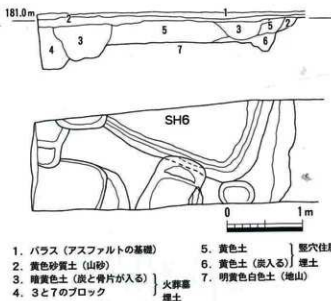
下戸山古墳測量図 トレンチ配置圖



調査地 (T-4) 遺構図



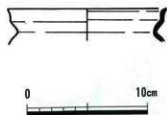
調査地完掘状況 (北東から見る)



竪穴住居と火葬墓 実測図



竪穴住居と火葬墓 (南西から見る)



出土遺物実測図

50cm。近世以降のものであろう。竪穴住居は方形で検出面から床面までの深さが30cm、幅30cm深さ12cmの壁溝がある。布留式併行期（4世紀後半）の受口状口縁甕が1点出土した。集落域ではなく古墳に隣接した丘陵地から竪穴住居が検出された例は町内では安養寺古墳群でやはり布留式併行期のものが1棟ある。モガリ屋など古墳に関わるものか、監視施設などの可能性が考えられる。今年度の調



1996年度調査 T-1

査は前方部の確認を目的として実施したが、葺き石などの前方部に関わる遺構は発見できなかった。下戸山古墳の墳丘形態については、円墳の可能性も十分考慮に入れるべきではあるが、前方部確認については調査区の設定位置についても今後検討する必要がある。なお、下戸山古墳は1999年3月に町史跡に指定された。

佐伯



1996年度調査 T-2



下戸山古墳航空写真

職員の活動記録

◎研究集会等での発表

近藤 広

- ・第75回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「辻遺跡」1999.3 滋賀県埋蔵文化財センター
- ・第45回埋蔵文化財研究会「弥生時代の集落 一中・後期を中心として」1999.2 甘木市総合市民センター

佐伯 英樹

- ・第75回滋賀県埋蔵文化財センター研究会「林遺跡」・「野尻遺跡」1999.3 滋賀県埋蔵文化財センター

◎論文・研究報告他

近藤 広

- ・「近江高島郡における渡来系文化」『滋賀考古』第20号 滋賀考古学会 1998.8
- ・「野尻遺跡における地震の痕跡」『古代学研究』第143号 古代学研究会 1998.8
- ・「野洲川流域における弥生中・後期の集落」『弥生時代の集落 一中・後期を中心として』第45回埋蔵文化財研究会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 1999.2
- ・「近江最古級の須恵器出土ー辻遺跡」『滋賀文化財だより』No243 滋賀県文化財保護協会 1998.4.20

佐伯 英樹

- ・「国境はいずこ」『国絵図ニュース』第2号 国絵図研究会 1998.7.18
- ・「弥生時代後期の墓域と集落を調査ー雑遺跡」『6、7世紀の竪穴住居6棟が出土ー岩畑遺跡』『滋賀文化財だより』No243 滋賀県文化財保護協会 1998.4.20

雨森 智美

- ・「近江国栗太郡における倉庫遺構」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所 1998.12

藤岡 英礼

- ・「地方における縄張り研究の現状と課題ー特に和歌山県を素材としてー」『愛城研報告』第4号 1999

発行日 2000年3月31日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団

埋蔵文化財調査課

滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47番地 〒520-3011

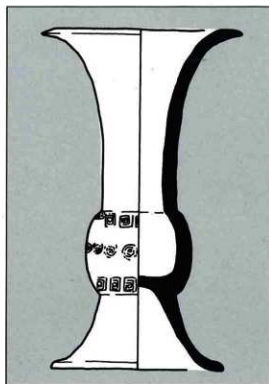
栗東町出土文化財センター内

TEL 077-553-3359 FAX 077-553-3514

印刷・製本 (株)スマイ印刷工業

滋賀県栗太郡栗東町大字川辺568-2 〒520-3014

TEL 077-552-1045



多福寺遺跡出土花瓶 (S = 1/2)